慶應義塾大学ビジネス・スクール

スターバックス コーヒージャパン㈱

ナスダック・ジャパン上場

2001年10月10日、スターバックス コーヒージャパン㈱はナスダック・ジャパン市場に株式上場した。高い知名度を背景に、公募・売り出し価格（6万4千円）を25%上回る初値（8万円）を付け、最終的に初日の取引を7万円（株式時価総額994億円）で終えた。売買総額は80億円弱に達し、新興企業向け株式3市場の中で、日本マクドナルドを抜いて最高となった。初値ベースの予想株価収益率（PER）は87倍と、コーヒーチェーン最大手ドトールコーヒーの約3倍に達する。あるファンドマネージャーは「スターバックス・ファンの個人が買いに殺到した」と初値上昇の背景を分析している。

同社CEO角田雄二氏は「本物のコーヒーをおしゃれな雰囲気の中で従業員が心を込めて提供するコンセプトに、全国から賛同を頂いた。現状の（厳しい）株式相場でこのような評価を受けて光栄に思いますが、今後も油断することなく株主のためにがんばります」と語った。

2002年2月になって、同社は2001年4月―12月決算を発表した。売上高は新規出店効果が寄与し、前年同期比72%増の35,126百万円となったが、経常利益は前年同期比16%減の1,197百万円に終わった。2001年8月以降、既存店売上は前年同月を下回り、10月以降はさらに減少幅が6～7%と拡大した。地方都市など出店当初の人気が一巡し、店舗増加に伴って人件費や賃貸料もかさんだことが要因である。2002年度3月期売上高予想は47,200百万円であり、2001年11月に発表した中間決算時の予想を1,300百万円下回る見込みである。予想経常利益は1,500百万円、同・当期純利益700百万円であり、それぞれ中間決算時予想より600百万円、300百万円下方修正している。発表後に株価はストップ安の3万3700円をつけ、上場以来の安値を更新した。3月11日にはさらに29,100円に下落し、時価総額は上場時点から約60%減少した。

合弁会社の設立

スターバックス コーヒージャパン㈱は、コーヒー等の販売およびコーヒー店経営を目的として、アメリカのスターバックス・コーポレーションと日本の㈱サザビーとの合弁会社

このケースは慶應義塾大学ビジネススクール・山根 節と安田聡(MBA24 期)がクラス討議のために公表資料と取材をもとに作成した。(2002年6月)